

- 調査期間 1995年10月30日～1996年4月30日（予定）
- 調査面積 約1,060㎡
- 所在地 京都市上京区下立売通智恵光院上る分銅町556番地
- 調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 調査成果
- 1 平安宮跡内で初めて井戸を検出した。
 - 2 釜所・侍従所跡に関わる路面・柱穴・土壇などを検出し、平安時代前期の遺物が多量に出土した。
 - 3 聚楽第の堀は検出できなかったが、金箔瓦などの遺物が出土した。
 - 4 江戸時代の聚楽土土取穴を多数検出し、土取穴の特徴や町屋の様子が明らかとなった。

1 調査地点周辺の歴史

平安京は古代都城の中で最も後出の都城であり、景勝の地にかない、合理的に設計された都城である。京の中央北端には、政治・儀礼を行なう場である平安宮が位置していた。平安宮の規模は、東西376丈（約1,122m）、南北460丈（約1,372m）の広大な面積を占め、その四辺を現在の通り名で示せば、北は一条通、南は二条通、東は大宮通、西は御前通となる。

平安宮内の中央部には朝堂院・内裏・豊楽院などの主要施設が占地し、周辺には、二官八省やそれに属する官衛、天皇に関わる内廷機関、あるいは倉庫群が配置されていた。

今回の調査地点は、平安宮の中央東寄りに位置し、内裏に東接する官衛に該当する。この1区画は『宮城図』や文献史料などから、外記・南所・御書所・釜所・侍従所などが占地していたことがわかる（表紙参照）。

官衛が占める広さは40丈（119.4m）四方が基本であるが『宮城図』では南接する西前房との境界をなす路幅4丈（約12m）の勘解由小路延長路を両方の敷地に取り込んだように描かれており、ここでの南北幅は42丈（125.4m）あったと考えられる。

ここに置かれた、外記・南所・御書所・釜所・侍従所の官衛のうち、釜殿は、釜殿に所属する官人の詰所、侍従所とは、侍従の侍候する場所とされる。侍従所については、いくつかの史料によって宴飲歌舞を中心に平安時代前期から後期にわたって存続していた状況が窺えるが、概して史

結政所 外記	釜所
南所	侍従所
御書所	

九条家本『宮城図』

釜所	侍
南所	従
御書所	所

校本拾芥抄略図

外記序	釜所	酒殿
南所	内豎所	
一本御書所		

『大内裏図考証』
校訂図

図1 諸図による
占地の様子

料が少ないため、具体的な占地状況や建物配置、存続期間などはわかっていない。

桃山時代になると、当地の北側には豊臣秀吉が聚楽第^{じゅらくだい}を造営し、その周辺には大名屋敷が造営される（図4）。ところで、調査地の西側は一段低い地形が東西に連続しており、これは聚楽第の堀跡とされてきた。調査地点はその東にあたることから堀の検出が期待されたが、それらしき遺構は検出できず、ここに堀は延長していないことが判明した。

江戸時代になると、周辺には町屋が築かれる。『洛中絵図』（1642年頃作成）を見ると、智恵光院通は昌福寺以南へは開かれていないが、調査地点北側の東西道路は昌福寺に通じており、この道路に面して町屋が配置されていた様子がわかる（図5）。調査区内では巨大な土取穴が多数掘られていたが、これは町屋背後の空閑地が土取りとごみ処理場に利用されていたことを示すものである。江戸時代も中頃を過ぎると、智恵光院通も南に通じ、町屋の数も増加して今日見る市街地になったのである。

2 平安時代について

① 遺構 井戸・道路敷・柱穴・土壇跡などを検出した。平安時代の遺構はわずかに調査区の東端、北端、西端の比較的高い箇所に残存するに過ぎない。

井戸 調査区東端で検出した。平安宮跡における初の井戸検出例である。井戸掘形の規模は、東西約5.4m、南北約5.8m、井戸底までの深さは、現状で検出した面より4.3m以上ある。底面と井戸枠は未検出である。枠材を抜いた後に埋め戻されていた土層から、平安時代前期から中期に属する多量の土器が出土した。掘形内から出土した土器より、平安時代初め頃に造られた井戸であることは確かである。検出位置は釜所の南東部に当たり、東面築地から約10m、北面築地から約50mに位置する。

道路敷 調査区南西で東西約3.5m、南北約5mにわたり検出した。小礫を敷き詰めた堅固な路面は平安京の大路・小路に共通する施工方法で造られている。路面は3面以上確認した。中央側が低く造られており、その上面には砂が堆積する。この砂は路面上を水が流れたことを示す。

北に3m離れた地点でも狭い範囲であるが路面が残存しており、南北方向の道路であったことがわかる。また、路面検出位置は区画内のほぼ中央部にあたるため、区画内を東西に2分する南北の小径^{こみち}と考えてよい。礫敷きの道路遺構は平安宮内では中務省跡（1990年調査）に次いで2例目である。

なお、路面の下層には土壇があり、路面が造られる以前に土壇が掘られる時期があったことは確かである。さらに、路面を破壊する土壇には平安時代前期終わり頃の遺物が多量に含まれることから、道路の存続期間は比較的短かったこと

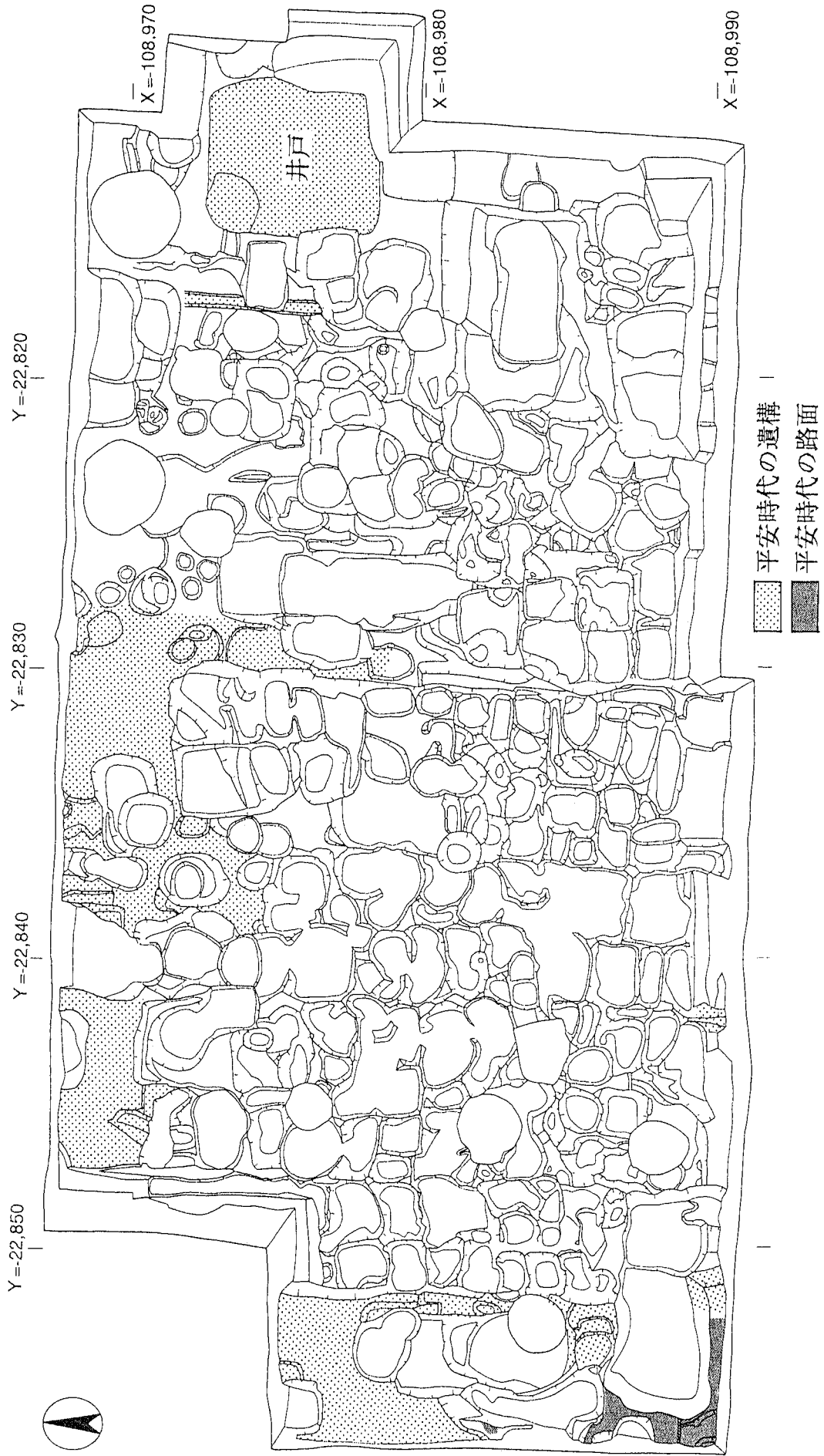


図2 遺構配置図 (1/200)

も判明した。路面の規模並びに路面に伴う側溝や築地の施設は、周囲が削平されていることから明らかでない。

柱穴 調査区内北端で柱穴（建物の柱を埋めた穴）を検出した。掘立柱建物が建てられていたことは明らかであるが、建物を復原するには至っていない。検出した柱穴は、平面が方形や円形を呈し、大きさは一辺、深さとも0.5m前後の規模をもつ。

土壌群 調査区の北端東側から西端にかけての広い範囲で土壌を多数検出した。規模や形状は様々で、造られた目的は判然としない。調査区西端の土壌は、地山（人間の手加えられていない土層）の砂礫層面まで掘られているため、平安時代の土取穴（黄色土を採取した穴）の可能性も考えられる。これらの土壌からは、平安時代前期から中期に属する遺物が多量に出土している。

② 遺物

土器類 土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器^{ゆにゅうとうじき}の他、墨書土器^{ぼくしよどき}などがある。井戸、土壌と江戸時代の土取穴からも多量に出土している。特徴をいくつか示せば、緑釉陶器は比較的豊富に出土しており、椀・皿・段皿・托^{たく}・火舎^{かしや}などの種類がある。平安宮内で緑釉陶器火舎が出土したのは、内裏南方と中務省跡の2箇所しかない。

墨書土器は現状で数点を確認している。灰釉陶器椀の底部外面に「南^曹□」と墨書したものが井戸から出土している。調査地点の西側には「南所」が置かれていることから、それとの関連が注意される。

輸入陶磁器では平安時代前期の越州窯青磁椀がある。例を見ない大型の優品である。これも井戸から出土した。

瓦類^{のきまる のきひらかわら} 軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、緑釉軒丸瓦、緑釉丸瓦などがある。軒丸・軒平瓦は出土点数が200点を越える。平安時代前期から後期までのものがあり、調査地に瓦を葺いた建物が存続していたのか、あるいは周囲から持ち込まれここに廃棄されたのか、検討が必要である。また、藤原宮式^{ふじわらきゅう}・平城宮式^{へいじょうきゅう}という旧都から搬入された軒瓦も出土している。

③ まとめ

平安宮内で初めて井戸を検出したことが特記できる。宮内の調査は小面積の調査が多く、このため井戸に遭遇する確率は低かった。今回、広面積を発掘調査した結果、検出できたのであり、その意義は大きい。検出した井戸は釜所内に掘られたもので、性格については検討が必要である。また井戸から出土した多量の土器は、層序にそって取り上げており、整理が進めば平安時代前期から中期初めの土器資料として貴重なものとなる。

第二に、南西隅で南北方向の礫敷き道路を検出し、区画内を東西に2分する施設の存在を明らかにした。さらに路面と土壌の関係から、まず土壌が掘られる→礫敷き道路が通る→道路を壊して再び土壌が掘られる、の最低3期の変遷があったことがわかった。

このほか、多数検出した土壌は、ごみ処理や土取穴、整地などの性格が考えられる。これらの遺構も官衙内での土地利用の実態を知る資料である。

3 江戸時代について

① 遺構 検出した遺構には、^{つちとりあな}土取穴・^{いど}井戸・^{どこう}土壌跡などがある。

土取穴 調査区の北端と西端を除く、ほぼ全域で検出した。深さは検出面から約2mに達しており、調査区内に堆積する黄色土（地山・いわゆる聚楽土）の採取を目的に掘られた穴である。土取穴は、平安宮跡を初めとする京都市街地では黄色土が分布地点で必ず検出される遺構であるが、そのため平安時代の遺構は破壊されることが多い。今回は広面積の調査であったことから、分布状態、平面形態、土取・埋め戻しの順序などの特徴が把握できた。

それによると、中央東寄り（Y=-22,830付近）では狭いながら地山が南北に連続する箇所があり、これを境に東西で状況が異なる。西側では、この境界から6m、5m、6m、4mごとに地山の高まりが南北方向に連続しており、これを大区画とみることができる。大区画の内部は東西に二分するように穴が掘られている。この結果、東西2～3m、南北1.5m程度の規模が最小単位となっている。これに比べると境界の東では規則性はさほど明確ではなく、規模や形状はばらつきが大きい。

土取穴の埋め戻しに際しては、不必要であった砂礫層や汚れた土層（平安時代の遺物がここに含まれる）を埋めた後、中区画、大区画と順次上方を埋めてゆく

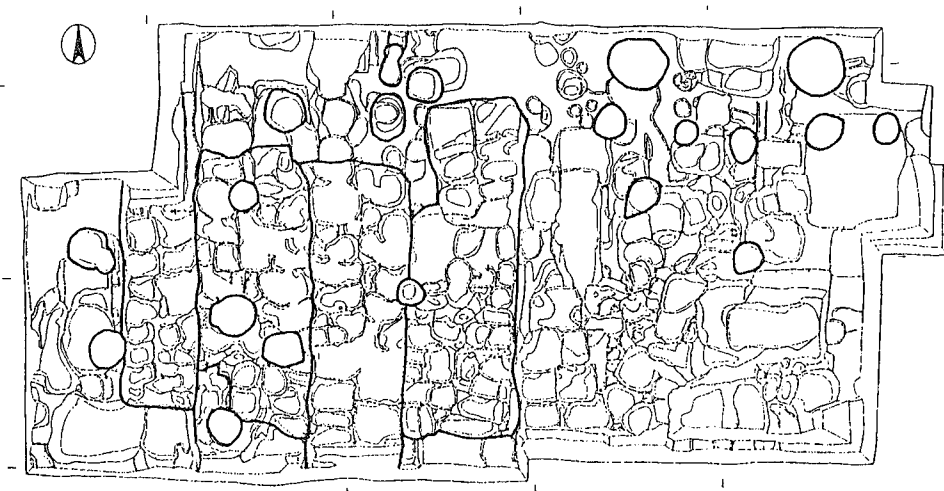


図3 土取穴および井戸の概要 (1/400)

工程が断面の土層観察から明らかとなった。

井戸 10数基検出した。石材を円形に組んだものと、石材が抜かれたものがある。調査区北東部では北半に集中してみられた。中央から西側ではほぼ均等に分布する。

井戸と土取穴の分布と関連させてみると、北半に集中するものは間口5～6 mの民家内に取り込まれて造られた井戸とみられる。一方、西側の井戸は土取穴の上から掘られており、こちらは西側に間口をもつ民家の井戸であったと思われる。

② 遺物

土器類 土師器や陶磁器などで構成される。土取穴を中心にごみ穴、井戸などから出土している。土取穴には平安時代の土器に混じって少量出土するものもある。

江戸時代前期では唐津^{からつ}や志野^{しの}、織部^{おりべ}、染付^{そめつけ}などが出土している

瓦類 軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、鬼瓦^{おに}、熨斗瓦^{のし}、棧瓦^{きん}などがある。特記すべき瓦として金箔瓦^{きんぱく}がある。調査地点は聚楽第に南接する中村邸に該当することから、そこで使用された瓦の可能性はある。

その他 土製品としては伏見人形などの玩具・泥面子^{どろめんこ}・塩壺^{しおつぼ}、鑄造関係ではルツボ。石製品では硯^{すずり}や軽石などがある。

③ まとめ

調査地の西側にある昌福寺・松林寺境内は、周囲の地形より低いことから、聚楽第の堀とも予想されている（『京都歴史アトラス』「豊臣秀吉と聚楽第」。しかしながら、調査区内では堀跡はなかった。『京都屏風図』『洛中絵図』では調査地付近で地割りが異なり堀の形跡はない。堀跡は今後の調査の進展により確認していきたい。

調査区のほぼ全域で土取穴を検出した。一帯は聚楽土が深くまで堆積するため良好な土取場であったようで、巨大な土取穴が規則的に掘られた様子が明らかとなった。形状や規則性の違いが分布範囲から指摘できたことは、小面積の調査では得られない成果である。

土取穴にみられた5～6 mの単位は、民家の間口幅に対応するものといえる。またこの方向が南北であることから、民家は北側の東西通りに玄関を向けて並んでいたことがわかる。調査地の北端で平安時代の遺構がわずかに残るのは、この範囲が民家の下であったためである。調査地西半では土取穴と重なって井戸が掘られていたが、こちらは智恵光院通が開かれた後に間口を西に面した民家が並んでいたことを示すものといえる。

なお、調査地西端では、平安時代の礫敷路面や土壌が残っていたが、これはY

=-22.852付近に何らかの境界があり、そのため土取が及ばなかったためと考えられる。智恵光院通に面して町屋が建てられて以降も、家屋の下で遺構が保存され今日に至ったのである。

付録 井戸の記録

平安宮の井戸については、いくつかの文献史料に見ることができる。一例として、承平5年(935)には、大蔵省の井戸に、水汲みの女が落ちて溺死したこと、天曆3年(949)には、^{おんみょうりょう}陰陽寮の井戸に落ちて死んだ者がいたが、^{けがれ}近辺の諸司の人々はそれを知らずその水を汲んで用いたため、その穢は宮中に及んだなどの記事がみられる。以上、井戸の規模をうかがい知る史料として参考までに掲げた。

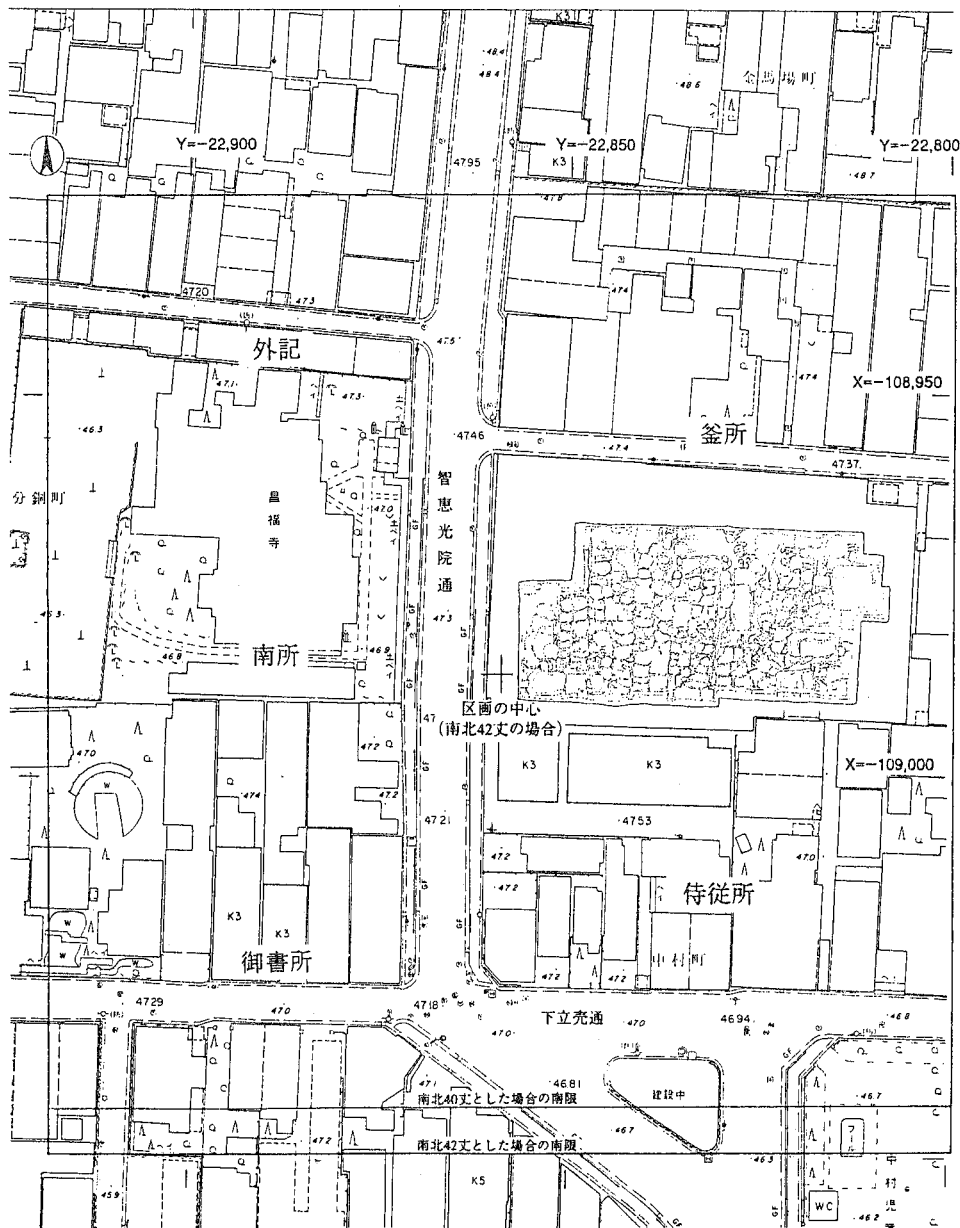


図4 官衙の外周と調査区配置図 (1/1,000)

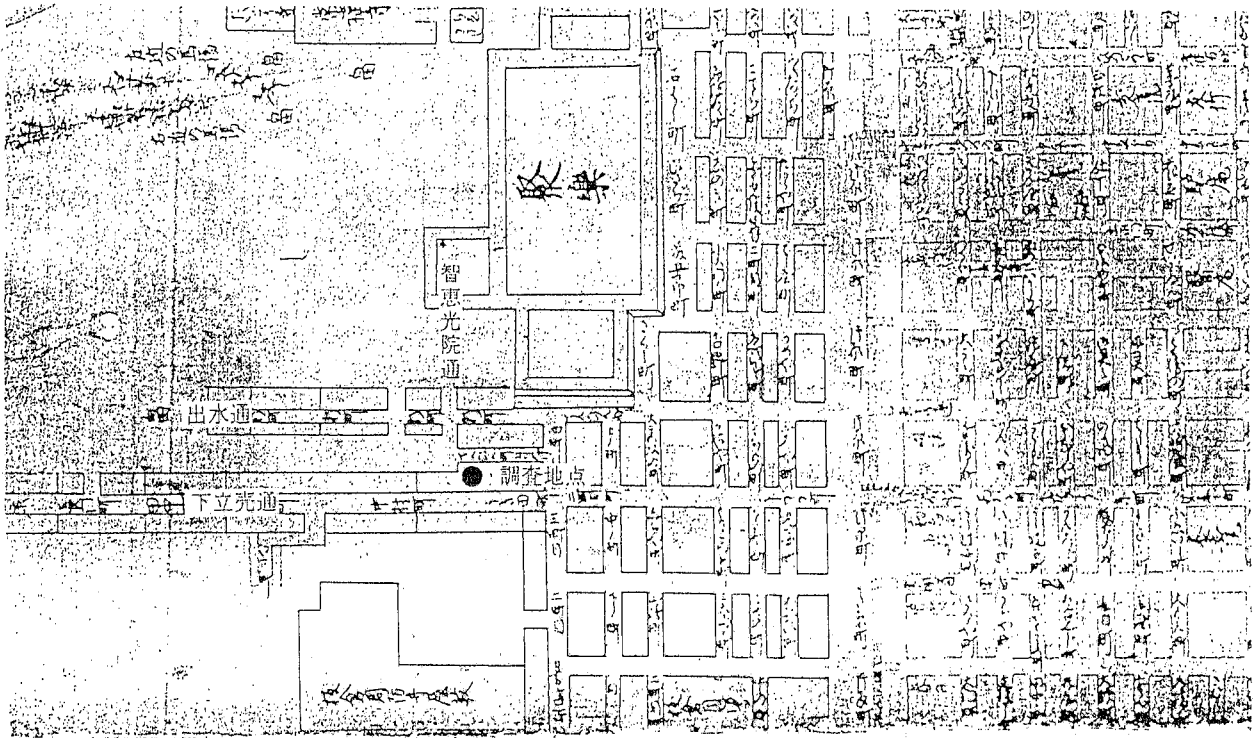


図5 『京都屏風図』に見る調査地点付近



図6 『洛中絵図』に見る調査地点付近



写真1 調査区全景（東から）

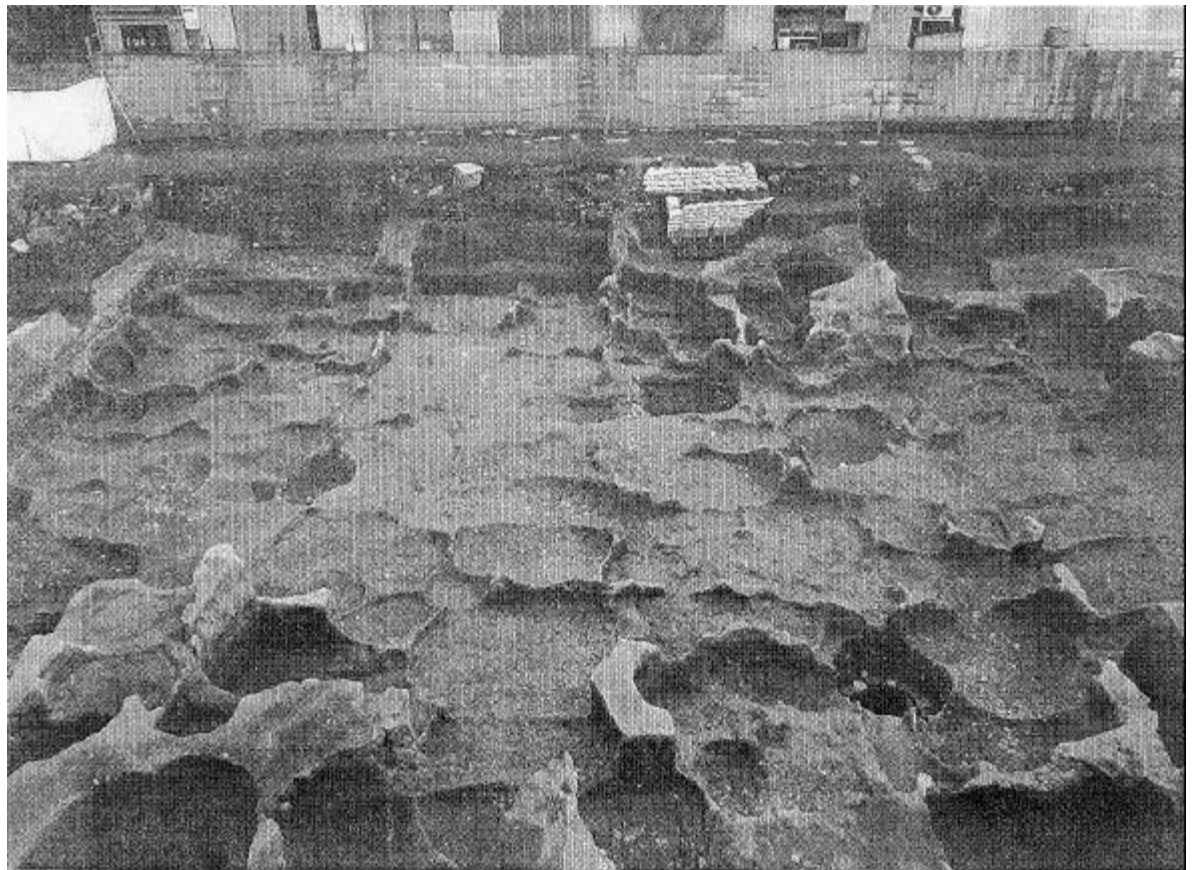
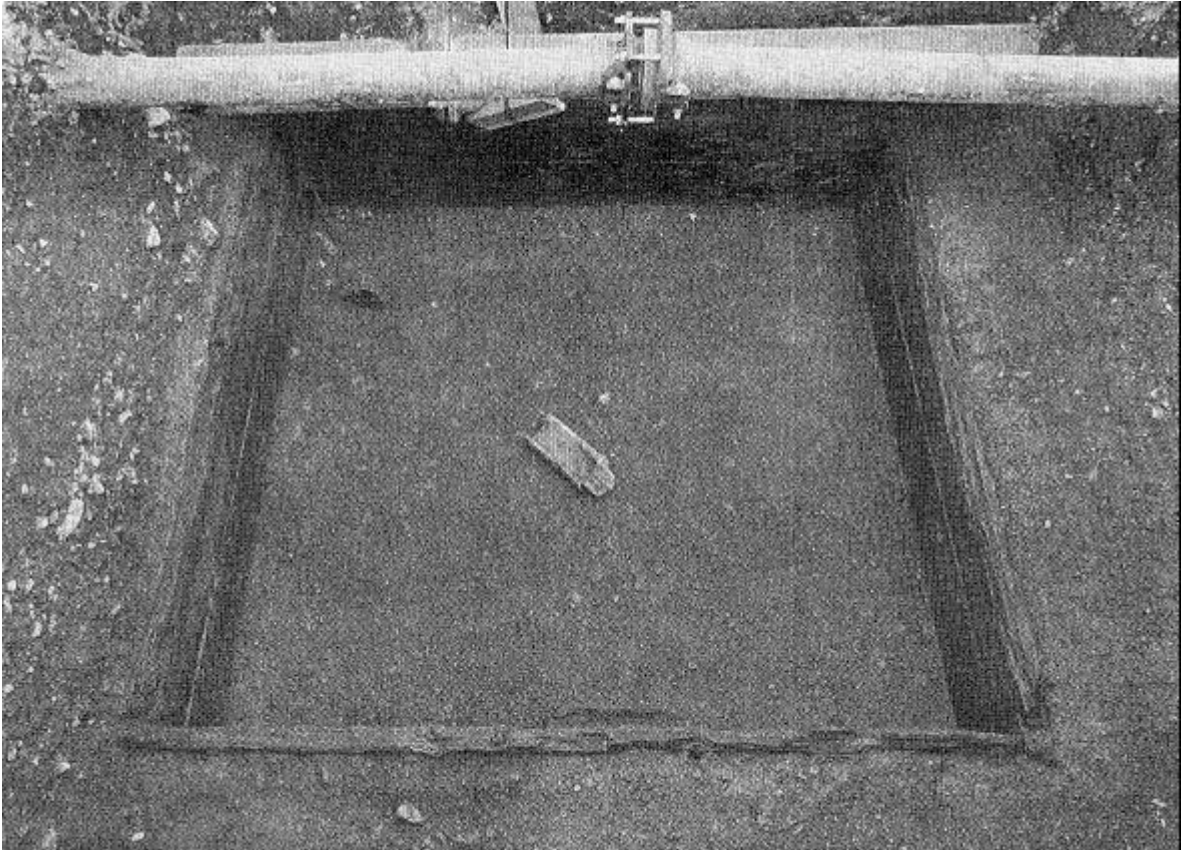
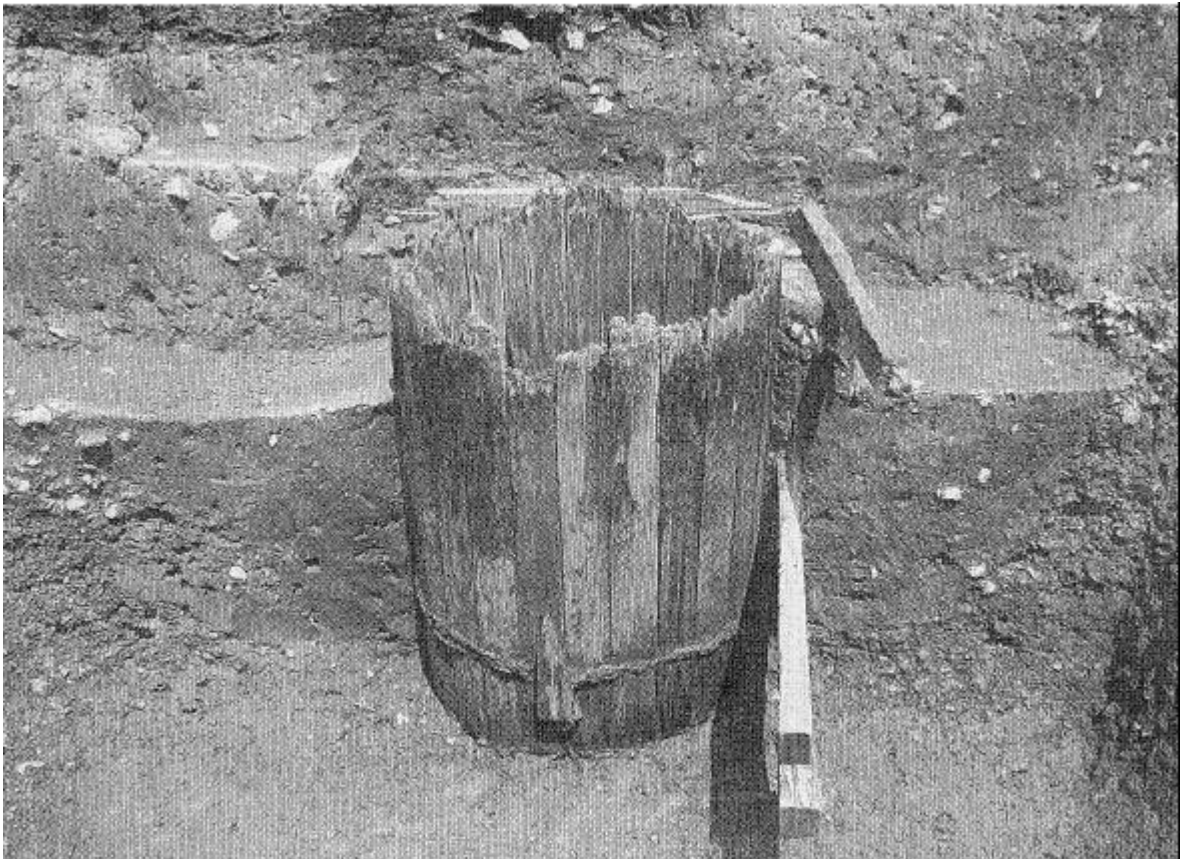


写真2 土取穴近景（北から）



参考写真1 西寺の井戸跡 方形横板組（井籠組）井戸の例



参考写真2 平安京左京三条三坊十三町の井戸跡 外側に井籠組の横板が残る

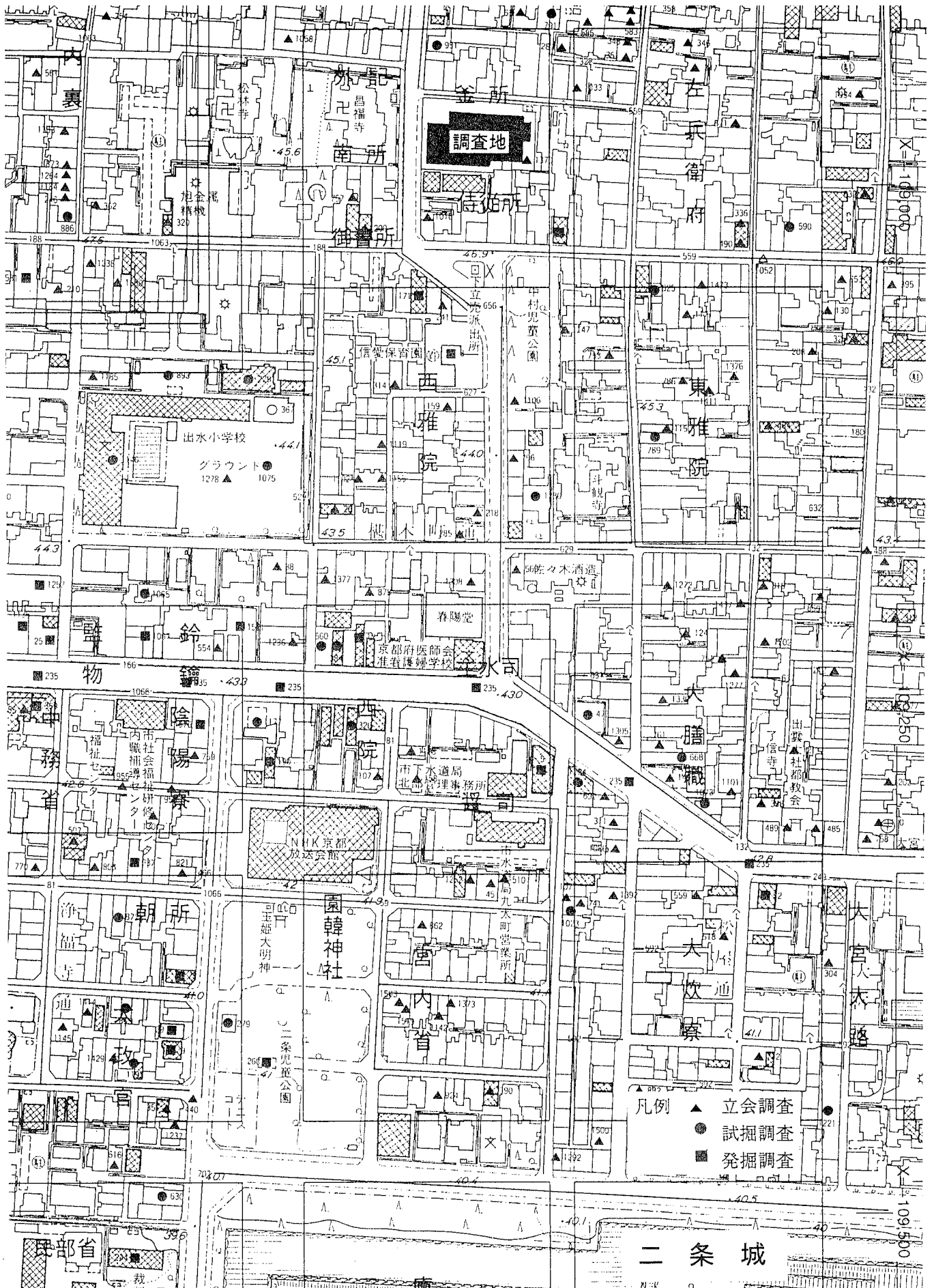


図7 調査地点位置図 (1/2,500)